

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18592313
 研究課題名（和文）アクションリサーチに基づく看護教育における「隠れたカリキュラム」に関する研究
 研究課題名（英文）Action Research of Hidden curriculum in nursing education
 研究代表者
 澁谷 幸（SHIBUTANI MIYUKI）
 畿央大学・健康科学部・准教授
 研究者番号：40379459

研究成果の概要（和文）：

看護教育に従事する看護教員・看護師を参加者とするアクションリサーチにより、看護教育における6領域のH.C.（看護における困難な局面の強調・低い自己評価・学習動機の喪失・看護の理想と現実の認知・古い教育観による学習姿勢の刷り込み・不適切な組織適応様式の習得）が抽出された。また、研究参加者には、「教育観の迷い」「教育活動への不安全感」「不透／ネガティブな教師像」から、「将来像への展望」「自己モニタリング能力の獲得」「新たな教育観の獲得」が語られるようになるという変化が見られ、H.C.の探索が、看護教育の質向上と看護教育者の成長支援に資する可能性が確認された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to obtain an overview of the hidden curriculum (HC) in nursing-education activities and to describe various aspects of changes among nursing educators and clinical instructors brought about by better awareness of the hidden curriculum (HC). Action research was conducted, with group discussions regarding HC in nursing education as the intervention. From participants' statements, six types of HC were distilled: "exaggeration of difficulties in nursing," "low self-esteem," "loss of motivation for learning," "recognition of ideals and realities in nursing," "stereotyping old-fashioned learning," and "acquisition of inappropriate adjustment to organization." And participants reported change in the following three aspects: "outlook over their future image," "acquisition of self-monitoring ability," and "acquisition of new views of education." after participating in this study

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：基礎看護学・看護教育学

キーワード：看護教育・隠れたカリキュラム・アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

H.C. (Hidden Curriculum ; 以下 H.C.) は、教育成果を方向付ける潜在的な要因であるが、学習者に及ぼす影響は決して小さいものではない。教育学における研究では、ジェンダーや道德教育、体育教育における領域での研究が行われており、学習者の人格形成や倫理観の育成と関連する要因として注目されてきた。近年、看護教育では、高等教育化が進んでおり、看護実践能力の育成に向けた教育プログラムが様々に検討されている。看護教育では、医療チームの一員として自律的に活動できる看護師の育成が叫ばれているが、看護実践現場においては、看護師のアイデンティティや自律性が確立されにくい状況は依然として続いている。医学教育においては、医師の倫理観の育成における H.C. の影響が取り上げられているが、看護職者のアイデンティティや自律性の形成においても、その学習過程における H.C. の影響が疑われる。しかし、看護教育プログラムやカリキュラムの検討においては、これまでに H.C. に言及されることはなかった。今後、看護教育の高等教育化がより進展する可能性がある中で、教育成果に影響を及ぼす潜在的諸要因についての探索は、看護実践能力に資する質の高い教育実践を可能にするために必要である。

2. 研究の目的

- (1) 看護教育における H.C. の解明
- (2) H.C. の解明過程に関与する研究参加者が、H.C. に対する理解を深める過程に伴って起こる変化の記述

3. 研究の方法

- (1) 操作的定義：看護教育過程において、教育者の教育活動や正規の教育課程とは別に、学生が無意識的、潜在的に学ぶ内容の総体。
- (2) 研究デザイン：アクションリサーチによるアプローチを用いて実施した。
- (3) 研究参加者：看護教育機関および病院に勤務する看護教育に関わる看護職者に H.C. の概念および先行研究を紹介し、本テーマに関心をもつアクションリサーチャーとして選任した。看護教員 15 名、看護師 8 名がアクションリサーチに参加した。

(4) データ収集方法：平成 19 年から平成 21 年の間に合計 5 回 H.C. をテーマとするグループディスカッションを開催した。グループディスカッションの様子をビデオと MD に記録し、その逐語記録をデータとした。

(5) データ分析方法：データ分析にあたっては、以下の点に焦点化し、質的方法によって内容を分析し、意味内容の類似性に基づき、カテゴリー化した。各カテゴリー間の関連を研究者全体で検討した。

- ①看護教育における H.C. の要素、影響
- ②研究参加者の意識、教育実践の変化

4. 研究成果

- (1) 看護教育における H.C. の概観
 - ① 看護教育における H.C. は、「教員に内在する要因」「臨床指導者に内在する要因」「学校に存在する教育的環境要因」「実習施設に存在する教育的環境要因」「メッセージ性のある教育活動」の 5 領域 29 要因のアウトカムとして存在する可能性がある。
 - ② 教員は学校の教員集団・組織のあり方と相互に影響し、学校に存在する教育的環境要因の一部として H.C. に関与している可能性がある。
 - ③ 臨床指導者は、実習施設の教育的環境要因と相互に影響し、その施設の慣習やスタッフの看護実践そのものから、学生は様々なメッセージを受け取っている可能性がある。
 - ④ 「教員に内在する要因」と「臨床指導者に内在する要因」はそれぞれ外的統制の影響を受けている。
 - ⑤ 「教員に内在する要因」と「臨床指導者に内在する要因」は学生と関わる場面で発生する H.C. に関係する可能性がある。
 - ⑥ 教員や臨床指導者が行う教育活動には、教育する側が想定していないメッセージが含まれている可能性がある。

以上の結果から、看護教育は、学校と臨床という 2 つの教育現場で行われることから、それぞれの現場の特徴とその連携の様相が、教育成果に非常に影響しており、看護教育における H.C. も、その特徴を反映していると思われる。また、学校の形態や病院の組織文化

によって H.C. の様相は異なることが推察された。それらは教員や臨床指導者が行う看護教育活動に最もよく反映されていると思われる、看護教育活動における H.C. のより詳細な分析が必要であることが明確化した。

(2) 看護教育活動における H.C.

① 学生に現れる影響および学生に伝達される潜在的メッセージを含む H.C. は、以下の 6 カテゴリーであることが明確化した。

- i 看護における困難な局面の強調
- ii 低い自己評価
- iii 学習動機の喪失
- iv 看護の理想と現実の認知
- v 古い教育観による学習姿勢の刷り込み
- vi 不適切な組織適応様式の習得

② H.C. が発生すると思われる教育活動は、以下の 4 カテゴリーであることが明確化した。

- i 職業教育への偏重
- ii 多様な看護実践の様相
- iii 不十分な実習教育環境
- iv 古典的看護教育の残存

以上のような看護教育における H.C. は、これまでに検討されてきた看護教育のカリキュラムや様々な教育プログラムの成果にネガティブな影響を及ぼす要因として看過できないものである。特に、学習者に「低い自己評価」や「不適切な組織適応様式の習得」がなされる H.C. は、卒業後の看護師に質の低い実践を容認させたり、主体性や批判的思考を喪失させることにもつながる可能性がある。これらは、看護師の成長やキャリア形成に影響する重要な側面であることが示唆された。

さらに、これらの諸要因は、諸外国においても共通の課題であることが明らかになった。以上より、看護教育における H.C. は、看護師養成および看護職者の成長過程を検証、開発する諸研究において、看過できない要素であり、より具体的な様相が明確化することで、看護教育活動の質向上に資する可能性が高いことが示唆された。

(3) H.C. の意識化がもたらす看護教育者の変化

アクションリサーチに参加した研究参加者は、本アクションリサーチによって H.C. への理解が深まり、自己の教育活動において意識化される機会が増えたことを語った。また、研究参加者の語りから、以下のような変化が認められた。

① 研究参加者は、アクションリサーチ参加以前の自分および自己の教育活動について「教育観の迷い」「教育活動への不安全感」「不透明／ネガティブな教師像」の 3 つのカテゴリーに属する自己像を感じていた。

② 研究参加者は、アクションリサーチ参加により、「将来像への展望」「自己モニタリング能力の獲得」「新たな教育観の獲得」の 3 つのカテゴリーに属する変化を感じていた。

教育従事者の F D は、看護教育のみならず、高等教育における昨今の重要課題となっている。本研究における研究参加者の語りは、H.C. の意識化が教育者に肯定的な変化をもたらすことを示していた。特に、「自己モニタリング能力の獲得」は、H.C. という概念の導入が、看護教育者の「リフレクティブシンキング」の起動装置として有効であることを示唆するものであり、H.C. の探索は、教育活動の改善とともに、教育者の成長に寄与するものであると考えられた。

< 本研究の限界と今後の課題 >

本研究は、看護教育の成果・効果に影響を及ぼす潜在的要因に着目したものである。本来、教育の成果・効果は学生自身に発生した変化により判断されるものであるが、本研究におけるデータ収集は、教育する側の経験の想起により行った。そのため、実際の学習者に影響している「隠れたカリキュラム」そのものをとらえたものではなく、結果はすべて教育者の予想の範囲を超えるものではない。今後は、本研究結果を元に、学習者の活動や「隠れたカリキュラム」の生じるフィールドを絞って、その詳細を明らかにすることが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

① M. Shibutani, Potential messages in nursing education activities Nursing educator's suppositions about hidden curriculum in Japan, 3rd International Nurse Education Conference, 2010, 4, 12 Sydney (Australia).

② N. Yamamoto, Changes in nursing educators attributable to the hidden curriculum coming into consciousness. 3rd International Nurse Education Conference, 2010, 4, 12, Sydney

(Australia) .

- ③ 澁谷幸, 看護教育における Hidden Curriculum の概観—看護教員・看護師が語った教育実態の分析から—日本看護学教育学会第 19 回学術集会、2009 年 9 月 20 日、日本赤十字看護大学(北海道)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澁谷 幸 (SHIBUTANI MIYUKI)
神戸市看護大学・看護学部・講師
研究者番号：40379459

(2) 研究分担者

山本 直美 (YAMAMOTO NAOMI)
神戸大学・保健学研究科・講師
研究者番号：70305704

(3) 連携研究者

田村 由美 (TAMURA YUMI)
神戸大学・保健学研究科・教授
研究者番号：90284364

石川 雄一 (ICHIKAWA YUICHI)
神戸大学・保健学研究科・教授
研究者番号：90159707